

# 学者の暴挙が 日本を救う

中野剛志



藤井 聡 著  
『公共事業が日本を救う』  
文春新書／2010年10月刊

著者の藤井聡氏は、土木計画学という分野で数々の業績や受賞歴をもち、若くして京大教授となった前途洋々の研究者である。その藤井氏が、本書執筆前までの心境を次のように書いている。

「実際のところ、筆者は今まで、自分の専門について真面目に研究をし、教育をすればそれで事足りると考えていた。だから、マスコミ報道や出版などで、少々専門的に不当でナンセンスな議論がなされていたとしても、それに對して何かを公的に発言するのは、自身の仕事ではあるまいと考えていた。むしろ、そういう意見も踏まえながら、日本の公共事業をよりよいものに改善していけばよい、と考えていた。」

どんなに世論が理不尽でも、このように考え黙って自分に与えられた仕事を真面目にこなしてきた人々は、学者に限らず多いのではないだろうか。建設会社、電力会社、郵便事業者、官僚など、世論の不当な非難や真実を歪めた報道がなされても、与えられた仕事を真面目にこなしてさえいれば、いつかは世論も変わるだろうと自分に言い聞かせながら、黙っていた人は少なくないだろう。それに、義憤にかられて声を上げたとして、ますます叩かれるだけで、どうせ分かってはもらえないのだから、黙っているのが賢い大人の対応というものだ。ところが、藤井氏ときたら、このような本を出してしまっただけである。

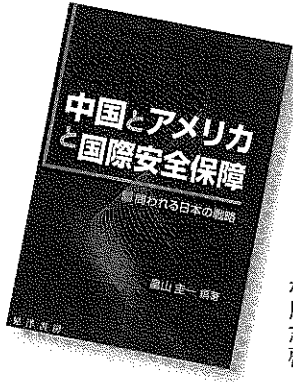
本書は、公共事業について、治山治水はもちろん、産業競争力、環境、文化、はては財政問題と、あらゆる方面から分野の枠を超えた総合的な検討がなされている。そして、強固な固定観念を打ち破るためであろうか、データや論理を駆使するだけでなく、分かりやすい語り口で、イメージが湧きやすい説得力ある事例をふんだんに盛り込んでいる。それらは、読者の論理だけでなく心理にも訴えてくる。例えば、本書が快刀乱麻で暴きだす、大衆迎合の学者や政治家たちによる数字の詐術には、どんな読者も、驚きを通り越して、検察の証拠捏造に匹敵する怒りすら覚えるだろう。

にもかかわらず、本書は、公共事業に対する世論や報道の歪みを正すことはできないだろう。人々を沈黙させる多数派の権力は極めて強大である。そのことは、社会心理学者でもある藤井氏なら、よく知っているはずだ。そして、大衆迎合の政治と喧嘩沙汰に及ぶような学者を学界がどう扱うのかも、十分分かっていたはずだろう。それなのに、藤井氏は本書を出してしまっただけ。義憤にかられて勝てる見込みのない戦いを仕掛けるのは、愚挙であり、暴挙であると言っほかない。

だが、藤井氏は知っているのである。正義のために敗北覚悟の戦いに臨むことほど痛快なことはないし、この痛快さは戦っている本人だけが味わえる特権だということ。

# 沈着な 米中研究の有用性

杉原志啓



島山圭一 編著  
『中国とアメリカと国際安全保障』  
晃洋書房／2010年6月刊

意見や感想の多い国、日本。およそ事実の考察と検証よりこちらが盛んといつてよいかもしれない。実際、かつての一億火の玉ではないが、なにか事変が起きれば巷は洪水のような「意見」だらけとなる。はやい話が、尖閣問題に火がつけば、ひたすらかくすべしみたいな昂奮の著述群一色に。

オンタイムの話題とあれば、たしかにそれはそれで面白い。ただ、ときにそればかりじゃなく、事実重視の沈着にして学術的な文獻も必要だろう。中国問題や日米関係をめぐって大波が押しよせつつあるいま、編者島山圭一氏はじめ国際政治プロパーによる『中国とアメリカと国際安全保障』は、その意味で、役にも立てば勉強にもなる時宜を得た重厚な論集となっている。

五部構成の内容目次は、順に「米中関係をめぐる理論と思想」「アメリカの国際戦略と米中関係」「中国の国際戦略と米中関係」「米中関係がもたらす衝撃」「米中をとりまく国際関係」で、現今日本の対外問題を考えるうえでまことにタイムリーな題目ばかり。で、どの項目も手堅い検証に彩られていて役に立つという謂は、たとえば第1部収録の「アメリカの国際秩序観と戦略思想の系譜」からみてとれよう。すなわちここでは、現在のアメリカ外交にも様々なかたちで影を落とすプラグマティズム、ビュリタニズム、「知性」より「情念」の優位、「反知性主義」等々、

かねてわれらの漠然と分かつた気味であるアメリカの精神史と歴史的伝統を改めて最新の観点からおさらい。そのうえで今後の世界秩序が展望されているように（なお、米国の中国への歴史的「思入れ」と右の「情念」との関連は、第四部の各論でさらに詳しく参照できる）。

他方、中国の歴史と伝統に関しても、われらのつい忘れがちなところ、いわれてみればなるほどの知見が各項目で多々言及されている。ほんの一例だが、たとえば「文明の衝突」としての米中関係」にいわく、中国のナショナリズムは「栄光の過去と未来への展望が結びつくなかで更新されている」が、かの国の一貫して「強い国をつくること」への指向は、日本を含む列強支配の下での屈辱の近代史に起因するという辺りだ。

米中の公文書や最新文獻に基づくこうした基本的考察に加え、さらに有用とおもわれるのは、米中両国の核、ミサイル、陸海空の軍事力の質量的かつ細密な検証、その観点からの日米中のパワー・バランス、中国の宇宙戦略、東アジアの海洋問題等々、書題に掲げられた「国際安全保障」問題におけるトレンド・トピックス群だろう。そしてその意味でもっとも興味深いのは、本書「終章」に記された「米中関係と日本」となる。米中の日本への出方につき、現時点で考えうるそのシナリオの数々には、だれしもつくづく考えさせられるはずである。